あの空へ

叶夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの空へ

【Ｎコード】
Ｎ５４５２Ｙ

【作者名】
叶夢

【あらすじ】
あなたに相談相手は居ますか？
あなたに恋人は居ますか？
あなたに男友達は居ますか？
その相手に強がっていませんか？
強がって強がって強がって…
我慢できなくなったとき、本当のあなたが見え始める…

君のひと言（前書き）

この話が本当の話か本当の話でないかは…
あなたが決める事です。

君のひと言

「今日の牡羊座の運勢は、恋愛が星三つ。お金も三つ。ラッキーカラーは紫です！」

今日も運が微妙だった…

「菜穂？お弁当…」

「あ…ありがと」

お母さんに弁当をもらう

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

母子家庭で育った私は、いつもお母さんが泣いてるのを知ってるから今まで反抗期と言うものがない

「菜穂！おはよ」

「うん、おはよ」

こいつは駿。駿も母子家庭でよく気があって相談もし合う仲だ

「今日の気分は？」

「微妙」

「また？」

「そんな朝からハイテンションなひとやじゃない？」

「ま、そのクールさが菜穂の特徴か」

駿のお母さんは、夫に女ができてある日突然居なくなったらしい
それからお母さんがうつ病になって、今バイトでせっせと頑張っているらしい

「今日もバイト？」
「うん。睡眠時間は三時間」
「また？もっとなんかないかな…」
「未成年ってばれてないしあの世界じゃ俺以外とモテるし」
「う～ん」

治療費や何やらでお金が足りず、駿は夜の仕事をしている

「駿！おはよ♪」
「おう」

夜の世界だけじゃなくて学校でもよく声をかけられる駿。
ただ自覚症状がないだけ

「今日も英語のノート見せてくれない？」
「たまには自分でやれよ」
「うん…ありがと」

最近の女子はそう言って駿としゃべるチャンスをつかんでる
…あの子以外は

「しゅ～ん～ちゃん♪」
「でた…」

この子は朝から下校時間までず～～っと駿につきまとう積極的な美優
この子の特徴と言えばガッツ利した身体に小顔がちょこんとのって、
吊り上がった目。
何よりその甲高い声が印象的

「美優、いいかげんやめねぇ？」
「やだやだ！美優駿ちゃん好きだからやめないぃ！」

朝から猛烈アタック。それをほかの女子は冷ややかに見る

「正直俺が迷惑だなぁ…」
「はいはいそんな事言ったら泣いちゃうよ？」
「もう…わかったよ…」
「は～い席着け～」

いいタイミングで先生が入って来る

美優と言えば体育の時間なんかもっとすごい

「あたしは特別！」

そう言って男子の体育に紛れ込んだり

「駿ちゃんけがさせたのあんた！？」

ってバスケの試合中に男殴ったり…
そんな姿に先生も若干諦めモード

――そんな美優が時にうらやましかったりする…

もっと駿としゃべりたい。
もっと駿に触れたい。
もっと駿の側にいたい。

そんな気持ちすら届かない

「本当今日も疲れたわ…」
「お疲れさん。駿も大変だね」
「あい――穂――だったら――……」
「…え？」

聞き間違いかと思った
でも、でも、確かに言ったよね

――あいつが菜穂ならいいのにって…

君のひと言（後書き）

菜穂の気持ち、分かってあげられるひとは、素直になれば楽になると思います♪

悩みすぎず、前向きに行きましょう！

君の行動

《昨日の事、深く考えんなよ…？》

次の日に送られて来た駿のメール

今日は土曜で、中学の友達の桜と遊んでた

《ダイジョーブ！》

《ま、美優みたいなこより菜穂みたいな子が好きだけどな♪》

駿はあたしにどう答えてほしいの？

「何そのメール。彼氏？」

「んな訳ないでしょ」

「じゃあ好きなひとか」

「んん…まぁ…」

「でもメールの内容最悪だね。放っとけばいいものを…」

「本当そうだよ…」

その日は桜と一日中愚痴って終わると思ってたのに…

《今から会えねぇ？》

「はい来た！ちょっと期待して行って来な♪あたしならいいから！」

「うん…」

桜に別れを告げて集合場所へ行った

「よぅ…」

「ん…」

「昨日はごめん」

「大丈夫だって！そんな言われたらよけい意識しちゃうなぁ～！」

意識してる事をばれるのが嫌で無理に笑ってみる

「そっか、じゃあ後半日俺に付き合ってもらおうか」

あたしの返事も聞かずに手を引く駿

「ゆ…」

「そう！遊園地！ガキに戻ってみねぇ？」

なんかその発言クサい…

そんな感じでジェットコースターなどの絶叫系に乗った

コーヒーカップに乗った後で…

「うぅぅ…きもちわるい…」

「大丈夫か？」

目の前がくらくらする…

「あっ…」

「おわっ！！」

その瞬間に駿に抱きかかえられる

「大丈夫かよ」

「ごめっ…」

離れようとした時

「えっ…」

「……」

抱きしめ…られてる？

「なに…」

「今どんな気持ち？」

「ばか…帰る…」

無理矢理はなれて背を向けたとき

「菜穂…」

「なに？あたしの気持ちも知らないで振り回さないでよ！」

「じゃあ菜穂の気持ち聞かせてよ」

「好きだよ！駿事大好きだよ！いっつも美優ちゃんに見せつけられて苦しいよ！寂しいよ！そんぐらい好きだよ！悪い？！鈍感！女心全然分かってないんだから！」

今度こそ帰ってやる！！

そう思って早歩きしても…

「んっ……」

追いつかれて不意に唇が重なった……

君の電話

「本当に?!それから?」

日曜日、また桜に会って街に出た
お昼時なのでちょっとしたカフェに入った

「それからって…送ってもらって…帰った」
「何それ!告白は?」
「あたしが一方的に言っただけ」
「何なの?そいつ大丈夫?」

駿の行動に不安を抱く桜

「どうだろねぇ」
「ちょっと聞いてみなよ!あたしの事好き?って」
「そんなの…」
「あたしも親友の事だし、ちゃんと知っときたいし」
「そう?」
「はい、携帯没収〜」

そう言って桜はあたしの携帯で何やらポチポチ押しだした

「はい、これ送るから!」
「えっ!」

《昨日は送ってくれてありがとう（＞＜）
昨日の話だけど、駿はあたしの事どう思ってるか聞きたいな…♪》

「なにこれ！全然あたしらしくないし！」
「そこが引きつける方法なの！」
「う～ん…でも…」
「送信っと♪」
「あ！」

桜から携帯を受け取った時は送信完了の文字が表示されていた

「桜ぁ～！」
「大丈夫だって！」

5分もしないうちに駿から返信が

《遅くまで付き合わせて送んない男は居ないっしょ！
俺は…菜穂の事、大事な奴だと思ってる》

「どうゆう事？」
「はっきりしない奴！なんでこんな奴…」

ぶつぶついいながらまた携帯を奪われる

《大事な奴って？それは友達として？それとも好きなひととして？》

「これは無いで――…」
「ハイ送信」
「もぉ！」

今度は何分経っても返ってこなかった

「都合が悪くなったら返信しなくなる奴なんか信用できるの？」

「……」

プルルルル…

「駿じゃん」

「うん」

「はい…」

『メールよりこっちのほうが早いと思って』

「うん」

『俺、今まで菜穂には、何でも相談してきたし、本当にいいダチだと思ってた。』

ダチ…

『でも、最近はなんか…そんなんじゃなくて…もっとこう…』

「…」

黙り込んでると、急に桜に奪われた

「さっきからうじうじ、うじうじ！菜穂の気持ち、ちょっとでも考えた事あんの？！

菜穂みたいな子が好きだって言ってみたり、突然キスしてみたり、あたしには君が

何をしたいのか分かんない！この際はっきりしてよ！菜穂の事、好きなの？嫌いなの？」

カフェに響き渡るぐらいの声で叫ぶ桜

「…そう…」

しばらくして桜はあたしに携帯を差し出した

「駿君から直接聞きな」

「…うん」

『菜穂…？』

「はい…」

『俺は、菜穂の事、すっげぇ好きだ』

「うん…」

『だから、俺とその…付き合ったりする事、考えてほしい』

やっと聞けたこの言葉…

『だめ…かな？』

「そんな訳ないじゃん…ばか…」

無意識に涙が出る

『菜穂？大丈夫か？』

「うん…じゃぁ…また明日」

『うん、明日は迎えに行く』

「ありがと」

機械音とともに駿の文字が消え、待ち受け画面に戻った

「なんだって？」

「付き合おうだって」
「そっか、よかったね！」
「うん…」

本当にこれでいいの？
駿の気持ちは本当のもの？
時間が経つたびにどんどん不安になって行く…

次の日の学校、何がおこるかも知らないまま
あたしたちは帰路についた……

君の唇

「菜ぁ穂♪」

月曜日、家の前に駿が居た

「お…おはよ」

「おはよ！」

そう言うと駿は手を差し出した

「ん」

「何この手は…」

「鈍感はどっちかな？」

笑いながら手を握られる

「なっ…あたし…こんなの初めてだし…駿は…なれてるかもしれないけど…

あ…あたしは…その…」

「緊張してんのは菜穂だけじゃないっつの」

駿の顔を覗き込むと頬が赤く染まっていた

「かわいい…♪」

「かわいいって言うな！」

そういつもの通学路を歩いていたら、視線を感じた

「どうして…」

「美優…」

「な…なんで…手なんかつないじゃってんの♪駿は…駿はアタシの人だよ♪」

強張った顔を無理矢理笑顔に変えて話す美優

「美優、俺ら付き合う事になったから」

「うそぉ！そんな冗談通じないって～！」

「本当の話」

「……」

笑顔が一変、鋭い目であたしを睨んだ

「絶対許さないから」

そう言って短いスカートを揺らしながら校舎内に消えて行った

「駿…ヤバいよあたし…」

「大丈夫。俺から絶対離れんなよ」

ドラマでしか見た事ない場面に戸惑うあたし

「おはよ」

2人で教室に入ったとたん、あたしの机がひっくり返っていた

「何これ…」

「さっき、美優ちゃんが来たとたんに机蹴って…」

クラスの友達が教えてくれた

「アンタが悪ぃんだろ」

教室の端から聞こえた声

「美優ちゃん…」

「何してんだよ？そんな事していいと思ってんのか？」

「だってそいつが悪いんじゃん！」

「なんでだよ？理不尽だろ！」

「なんで～？好きだって知ってて付き合ってんでしょ？裏切った同然だよね～」

「駿、いいよ。別に戻せば言い訳だし」

マジ切れして停学にでもなったらやだし、と思い、机を直した

「何いい子ぶっちゃってんの？ウケる～！！」

美優ちゃんがそう言うと周りの2、3人が笑い出した

「大丈夫か？菜穂」

「大丈夫、大丈夫♪それより停学沙汰にしないでよね」

「おぅ…」

こうして地獄の一日が始まった

「この問題わかるか？」
「はぁい！菜穂ちゃんがわかるってぇ！」
「はぁ？」
「じゃあ解いてみろ」

こんな問題わかんないし…
駿を見るとバイトの疲れで寝ている

「ＢＣ＝７０（ｍ）」

小声でそう言ったのは

「ＢＣ＝７０（ｍ）！！」
「正解！」

隣の席の隆だった
隆はとにかく賢くて、何でもできるクールな男子

「ありがと」
「いいよ、でももう少し勉強した方がいいよ」
「う…うん」
「あぁ！菜穂が隆と浮気してる！」

また騒ぎ立てる美優

「あぁゆう人間は放っとけばいい。気にするな」
「そ…そうだね」

「こら！騒ぐな」

「すいませ～ん！でもあの2人もイチャついー」
「騒ぐなって」
「はいはい」

授業が終わって駿に報告した

「そっか…ごめん、寝てた」
「あ、いや、大丈夫。答え隆に教えてもらったし」
「あ…あぁ…そっか」

その時の駿の顔を見てれば事件は起きなかったのに…

「菜穂！帰ろ♪」
「うん！」

そう言ってミキミキと音を立てる廊下を歩く

「またなんかあったら本当に言えよ？」
「うん、ありがと」

下駄箱に手を伸ばしたとき

「きゃっ…！」
「どうした？」
「これ…」

下駄箱の仲は泥だらけ

「あいつっ…！」
「駿？」
「ちょっと文句言ってくるわ」
そう言って駿は来た場所を戻って行った

「あぁ…」
「また美優？」
「へっ？」

振り向くと、眼鏡を光らせながら立っている隆

「あぁ…うん…多分ね」
「そ、菜穂も大変だな。でも、不登校なんかになったらもっと勉強わからなくなるぞ」
「その言葉がよけいだよwでもありがと」
「彼氏は？」
「美優に文句言いに行ったって」
「不安じゃないの？」
「え？」
「駿と駿の事好きって言ってる奴とが一緒になってて不安じゃないのか？」
「……」
「行ってこれば？」

隆が眼鏡を中指でクッと上げ、光の反射が当たる

「でも…駿の事信じてるから…」
「そうゆう問題じゃなくて…あんな無茶する美優相手だろ？」

どんどん不安になって行く

「行けよ」

「…うん」

あたしは駿の足跡をなぞるように廊下を走った

＊　＊　＊　＊　＊

「美優！」

俺は菜穂を置いて教室に戻った

「あ、来た来た。来ると思って待ってたんだぁ」

「何考えてんだよ！そんな事してなにになんだよ！」

「なににもなんないよ」

「は？」

美優は静かに俺に近づいてきた

「あたしは自分のためにやってんの。別に駿ちゃんと付き合いたいとかそんなんじゃない。

ただ、菜穂が駿ちゃんの側に居る事が気に食わないの」

「おまえ…」

「わかった。もうしない」

意外にいさぎよい美優に不信感を抱く

「駿ちゃんが一回だけキスしてくれたらね」

「…は？」

「選択肢だよ。菜穂を助けるため駿ちゃんがキスするか、菜穂は助けないからキスはしないか」

「そんな話には乗らねぇ――」

「じゃあ菜穂がどうなっても言い訳？」

「……」

また一歩近づく美優

「さぁどうする？」

また一歩

また一歩…

＊　＊　＊　＊　＊

「駿！」

そう言って教室のドアを開けたら

「さすが駿だね…♪」

「もう…菜穂には手ぇ出すなよ」

「うん。キスしてくれたから何もしない」

……瞬と美優のキスシーンだった

「な…何してんの？」
「菜穂…」
「ふふ…もうあたしは部外者だからぁばいばい」
鞄を持って教室を出る美優
「どういうこと？」
「…」
「あたしら…付き合ったばっかだよ？」
「…ごめん」
「なのに…」
自然に涙が出る
「菜穂…」
「もういい！駿がそんなひとだって…」
「菜穂！」
「駿は…あたしなんかどうでも良かったんだね…本当は美優ちゃんの事」
「俺の話も聞けよ！」
「言い訳なんか聞きたくない！」
駿の話も聞かずに誰もいない教室を出た

君の唇（後書き）

今回話が長くなりましたぁ…
書いてて駿がかわいそうになってきましたです。

君の気持ち

「そうか。お大事にな」

火曜日。駿に会いたくないのもあって体調が悪いと先生に連絡した

「菜穂。お母さん仕事行ってくるね」

「うん、行ってらっしゃい」

あたししかいなくなった家は静まり返っていた

《菜穂。今日学校休み？》

一時間目が終わったぐらいの時間に駿からメールが来た

《そうだけど？》

反発的に答えるかわいげのない女

《俺のせいか？》

《かもね》

そこから返信はなかった

「なんなの？何考えてるかわかんないよ…」

やる事もなく静かな部屋が嫌でＣＤをかけた

♪～　そっと過ぎ去ってく季節のなか
残された僕だけ…

素直に弱さを見せることさえできずにいた
不器用な愛だった

もう一度あのときのふたりに戻れるならば
迷わず君のこと抱きしめ離さない　～♪

中島美嘉のひとり…

付き合ってすぐこの歌詞に親近感を抱くなんて…

「駿の馬鹿…」

ずっと泣いた
前が見えないくらいに泣いた
泣き叫んだ
知らないうちに泣きつかれて眠りについた

――――ポーン…
―ンポーン…

「ん…」

時計を見ると夕方六時

ピンポーン…

部屋の鏡を見ると目が赤く腫れたあたし

「はぁい…」

力なく返事をして玄関へ駆け寄る

「はい…」

「おぅ」

そこには隆が立っていた

「どうして…」

「明日の連絡がてら見舞い」

「あ…そっか…上がって？」

「いいよ、すぐ帰るし」

「寒気するから…」

「うん…」

無理矢理隆を家に入れた

「で…大丈夫なの？」

「うん…」

「うんって…すっげぇ目腫れてるけど…」

「大丈夫」

「そ…」

隆の前にお茶を出す

「で…駿とは…聞くまでも無いか」
「隆は上手にひとの傷に触れるね…w」
「ごめん」
「ううん、いいの。キスしてた。付き合ったばっかなのに…」
「駿のこと、信じてたんじゃないの？」
「そうだけど…あんなとこ見たら…」

泣きすぎて涙も出ないと思ってたのにまた溢れる

「駿の話聞いてやった？」
「言い訳なんか聞きたくない」
「言い訳じゃない。駿が言いたいのは言い訳じゃないと思う」
「何それ」
「そんな気がする」

眼鏡の奥の瞳がなぜか悲しそうに見えた

「だから…明日来いよ。学校」
「……」
「駿の気持ち、聞いてやれば…？」
「うん…分かった」

それから隆と明日の予定を聞いた

「じゃあまた明日」
「ん…」

隆が渡したのは一本のペン

「明日菜穂が来ないと俺勉強できないから」
「なにそれ…念押し…？」
「そ。じゃあまたな」

隆が帰ってシャワーを浴びる

「明日は学校行ってやる！！！」
「ただいま…菜穂…大丈夫？」

隆のおかげで頑張ろうって思えた
でも…壁はそんなに低くはなかった…

君の想い

「隆おはよ…」
「おぅ」

隆のおかげで来ることのできた学校

「昨日はありがとう。はいペン」
「ん、それやるよ」
「え…いいよ」
「いいから、駿の気持ち聞くまで帰るの禁止」
「…わかった…」

あたしは静かに駿に歩み寄った

「駿…話しが…」
「駿ちゃ～ん！」
「は～い」

…何その仲良し感

「駿」
「なに？」

なんでそんな反発的になってんの？

「話がある」
「言い訳なんか聞きたくないんだろ？」

何なのそれ…！

「なんでキレてんの？」

「昨日…」

「メール？だってあれは…」

「違げぇよ」

「じゃあなに？あたしがなんか悪い事したって言うの？！」

朝から最悪…

「ちょっと来いよ」

「なっ…」

無理矢理腕をつかまれて図書室に連れて行かれた

「なに？！」

「昨日俺だって菜穂の家行ったんだよ！」

昨日…家…？

「隆…入れたろ？」

「今日の連絡とお見舞いに来てくれただけだし」

「…俺ら…ダチの方が良かったな」

何が言いたいの…

「1日だけだったけど…ダチに戻ろう…」

チャイムすらも虚しく聞こえる

「じゃぁ…教室戻るな」

前までは駿の側にいたいって思ったのに…
駿ともっと話したいって思ったのに…
こんな結末…

＊　＊　＊　＊　＊

重たい気持ちを引きずりながら教室のドアを開ける

「おい、遅刻だぞ」
「すいません」

そう言って席まで歩いてたら…

「菜穂はどうした…？」

言葉を捨てるように吐いた隆

「あ？」
「菜穂は？」
「…図書室だよ」
「早く座れ」

教師の言葉も耳に入らない

「誤解、解いたのかよ」
「うっせぇ、お前には関係ねぇだろ」
「あぁ、ないよ」

「いちいち口出してんじゃねぇよ」
「それは自分の彼女を大事にしてから言う言葉じゃないのか」
席から立って殺気立てながら近寄る隆
「お前なんかより俺はもっと菜穂を大事にできる」
そう言って隆の鞄と菜穂の鞄を持って教室から出て行った
＊　＊　＊　＊　＊
あたしはずっと窓の外を見ていた
「駿の気持ちなんか分かんないよ…」
そのとき
「菜穂」
「隆…」
「帰ろう」
「え…」
そう言うと鞄を差し出した
「こんな空気の悪い所…抜け出そう」
「隆…成績さがっちゃうよ…」
「もう遅いね♪」
子供のように笑う

「隆はなんでそんなに…あたしのこと…」
「放っとけないんだ。君みたいな危なっかしい子は」
「え…」
「菜穂。駿との傷は俺が癒す」
隆はそう言ってあたしの手を取り学校を抜け出した
「はぁ、はぁ…疲れたぁ…」
「大丈夫か？」
「うん」
「で、こっからどうする？」
「え！無計画？w」
「いや」
「じゃあどこにでもどうぞ」
そう言って連れてこられたのは
「プラネタリウム？」
「そう、興味ない？」
「ううん、見たい」
「じゃあ行こう」
『この星座は――…』
そっと隆の顔を見てみる
「……」
眼鏡に映った星座がよりきれいに瞬く

――隆といると…なんだか落ち着く…

「菜穂…」
「はっ…はい」
「俺、こんな時にこんなこと言うのいい気がしないけど、菜穂のこと…好きかも」

ふわっと香る隆の髪の香り

「隆…」
「俺は菜穂を傷つけたりはしない」

こっちを向いた隆はいつもより倍にかっこ良く見えて…

「でもあたし…別れたばっかで…」
「それでもいい。世間体なんか気にしない」
「でも…」
「俺、本当は大学行って、国家試験受けて、医者の父さんの仕事継ごうと思ってた
そのためなら付き合ったりするのも結婚とかもどうでも良かった。
でも、菜穂に会って変わった。ヘンな言い方かもしれないけど運命だって勝手に思ってた…
とにかく、今俺が大事にしたいって思ってるのは、世間の目でもなく、自分の将来でもなく
菜穂なんだ…。菜穂が幸せなら俺はどうなってもいい…」

そう言ってくれる隆に…そっとキスをした
駿や隆を弄んでるって言われても仕方ないことをしてるのは分かってる

…もしかしたら隆を利用してるのかもしれない
でも…今はこう言ってくれてる隆だけを見たいと思った…

君の想い（後書き）

すれ違った2人
菜穂に別れを告げた駿。告白した隆。
一週間で起こってゆく事件
三角関係の行方は…

君の涙

「おはよぉ！」
「ん」

木曜日玄関を出ると駿ではない、隆がいた

「菜穂？」
「なに？」
「菜穂は、男と付き合ったとき、男に引っ張ってもらうか菜穂が引っ張るかどっちがいい？」
「ん～っと…どっちかって言うと引っ張ってもらう方がいいかな？でもなんで？」
「俺は両方できる設定なの」

そう言うと隆はあたしの手を握った

「……」
「…ちっちゃ…w」
「隆の手が大っきいだけだし！」
「そうかもな」

そんな感じで校門をくぐったとたん

「駿ちゃんと別れたと思ったら次は隆かぁ～！すごい度胸だね」
「美優ちゃん…」
「隆がかわいそうだと思わなかった訳？」

「菜穂、こんな奴気にしなくていいから」
「あたしは菜穂からでる犠牲者をなくそうと思ってるだけなのに～」
…確かに…あたしは駿も隆も傷つけてるかもしれない
でも…隆は気にしないって言ってくれた…だからそんな言い方しないで！

「行こ菜穂」
「美優なんかに何が分かんの？！」
「はぁ？」
「あたしはあんたが駿にベタつく前から好きだった。
なのに取っただ奪っただって騒いで、さぞおもしろかっただろうね！あんたからしたら。
でも結局そんなのに当てはまんの美優じゃん！教室でキスしたの誰だよ！
それに隆はその傷から救ってやるって言ってくれた！
その言葉を大事にしたいって思ったからこうして隆と付き合った！
なのに何で何も知らない美優なんかにそうやって言われないといけないの？
どう考えてもおかしくない？部外者のくせに！」

あぁ…言っちゃった…口の悪い奴って思われたかな…

「な…朝から何あつくなってんの？…だいたい――」
「あぁあ、菜穂にここまで言わせるなんて、とことん最低な女だね。
俺別に犠牲者になるつもりねぇし」

そう言って美優に近寄る

「お前見てぇな女一生幸せになんかなれねぇよ」

あたしたちが立ち去っても呆然と立ち尽くす美優

「…言ってやったw」
「すごいオーラだったねw」
「俺のことヤになった？」
「全然♪むしろ好きになった」
「菜穂若干キャラ変わってる」
「あたしのことヤになった？」
「全然♪むしろ好きになった」

ラブラブ全開で教室に入る

《菜穂、隆と付き合ったの？》

駿からのメール…教室にいるの分かってるくせに

《そうだけど》
《早くないか？》

何それ…

《気に食わないの？》
《ちょっと…》
《あたし駿が何考えてるか分かんない。ダチに戻ろうって言ったの駿じゃん》

何なの？美優も駿も朝から…

《あのときは…隆に嫉妬してて…》

《でも、あたしと駿が別れてなくても美優とキスしてた事実は変わらない》
《今日放課後はなそう》
《なにを？》

そこからメールの返信はなかった

「隆。今日ちょっと放課後待っててくれないかな？」
「いいよ」
「…なんでか聞かないの？」
「何となく分かるから？」
「そっか…駿に話そうって言われたの」
「分かった。ここでいい？」
「うん多分」

――そして早くも放課後…

「隆ごめんね」
「…聞き方によって気分悪くしちゃうかもしれないけど、俺は菜穂を信じてる」
「うん…」

隆もそりゃ不安だよね…ごめんね…

「駿…？」

何となく図書室に来た…そんな気がしたから

「よぉ」
「ん…」

「…昨日はごめん」
「……」
「まず…美優とのキスは…誤解ってゆうか…その…」
はっきりしない駿
「アピールしたい訳じゃないけど…その、美優があたしとキスしてくれたら菜穂に危害は
くわえないって…してくれないと菜穂がどうなってもいいってことだって言われて…」
「え…それって…あたしのためって事？」
「そ…そう…」
…責め立てた自分が恥ずかしい
「…あと、昨日別れようって言ったのは…隆が家に入って行くの見て…俺じゃだめなんだって…
嫉妬してたから…ついって言うのもあれだけど…」
隆の言ってた通り、言い訳なんかじゃなくて…
誤解を解きたかっただけなんだ
「だから…もう遅いかもしれないけど…俺らやり直せないか…？」
…あたしには隆って言う大事なひとがいる
でも駿もあたしのことを思って美優とキスした
あたしのことを好きでいてくれたから嫉妬して別れを告げられた
…それでも…誤解だったとしても…あたしの傷ついた時間は確かにあった
その傷を癒してくれると言った隆との時間もあった

—だから…

「あたしは…駿を選ぶことはできない。あたしには…早いけど隆って言う大切なひとができた。
結局この場面って美優と駿のときと同じなんだよ。あたしは隆のことが好き。
だからこそもし隆がどうなったとしても駿を選べない。ごめんね」

そっと駿の顔を見てみる

「…そっか…そうだよな……うん…幸せになれよ…」

—泣いてる…？

「じゃぁな…」

駿はうつむきながらあたしの髪をくしゃっと撫でて図書室を出た

「これでよかったの！！」

あたしは図書室内に響くぐらいに叫んだ

＊　＊　＊　＊　＊

あぁあ…俺って最低な事したんだな～…
まんまと美優の作戦にはめられたってわけ…w
ばかじゃねぇの…今頃遅いし…

そっと教室のドアを開ける

「……」

そこには隆が机にうつむいて…寝てる？

「菜穂のこと…よろしく頼むわ…」

独り言にしかすぎない言葉

「…お前って意外とイケメンだなｗｗ」

寂しい奴って自分で思いながら教室を出る

「俺に全部じゃねぇだろ」

廊下で聞こえた隆の声

「駿だって俺にはできないことがある」

「え…？」

「菜穂のこと守っていきたいとは思うけど、ダチとして接することはできないから」

「……」

「ダチならダチなりの相談の受け方ってのもあるだろ？」

「隆…俺お前のこと好きだわ」

その言葉に隆は気持ち悪いという表情を見せて

「俺は菜穂意外には興味はないね♪」

と言った

*

*

*

*

*

君の涙（後書き）

いやぁいやぁ♪自分で書いてて隆に会いたいって思いますねぇ♪
いいやつの設定でできた隆なんですけど、もうたまらんですな

君とあなたと私～1～

金曜日、やっとすっきりした気持ちで登校することができた

「おはよ♪」

そう言って教室に入った

「菜穂！」

そのとたん駿が笑顔で寄って来た

「な…なに？」

「俺ら、ダチでいれるよな？」

ちらっと隆を見てみると、こくんと頷いている

「もちろん！これからもよろしく」

「おぅ！」

その日からは駿、隆、あたしの3人で行動することが増えた

…ある日

「はい、修学旅行の計画をたててもらうからな」
急な先生からの知らせ…急すぎだし！
毎日が充実しすぎて忘れてた…
「ほぼ自由行動のみになるから、班適当に作って活動計画しろよ～」
どう考えても適当すぎ！w
そこがいいんだけど♪
「隆！」
「…駿は…」
駿の机を見ると4、5人の女子が群がっていた
「あれじゃ無理かなw」
「美優とでも行くんじゃないか？」
そうやって隆と笑ってたら
「あぁもぅ！俺だって決める権利はあるだろ！」
そう言って群れから這い出て来た
「すごw」
「俺お前らと行っていいか？」
「もちろん」
「…こいつらはどうするんだ？」
隆が指差す方向には目をキラキラさせる女子たち

「先生！班の人数はどうするんでしょうか？」
「一応一班４人で十班できるだろ？」

４人…
そう思ってまた女子に目を向ける

「菜穂ぉ！一緒にまわろぉ♪」

あたし目当てじゃないでしょw

「そりゃあたしを選んでくれるよね～駿ちゃん」

手を挙げて出て来た美優
速攻女子からのブーイング

「あのぉ…」

そこに入って来たクラスでも有名なアニオタ君

「僕たち5人でわかれたらおもしろくなくなるんだけど…君たちが
3人でいいならそうしてほしいな」

きた！！

「「喜んで！！」」

――と、3人でまわることになった修学旅行当日……早いわ！！

「わぁ！すごいすごい！！」

大阪の街にはしゃぐあたし

「ウォあ！！すげ！なにこれ！ここテレビで見たぁ！！」

「菜穂転けるなよ」

名所に心躍る駿

そんな2人を優しい眼鏡越しに見守る隆

「なぁんか…やっぱ俺邪魔かぁ♪」

「そんな冷やかし慣れっこだし！」

そうやって駿と隆の間に入って手を握った

「こうやってればみぃんないっしょでしょ！」

「菜穂…」

「高い高いでもしてやろうかw」

「ガキ扱いすんなばぁか！」

そんなこんなで大阪の名所をまわった

「あぁ！楽しかった」

疲れて布団を引いて転んだ

「でも…本当に先生無計画すぎだよな。男女で部屋一緒にしたら気使うし」

「そうだねぇ」
「ま、ふすまで区切ればいいさ」

どんどんすぎていく楽しい時間
駿目当てに部屋に来る女子もいた
こんなのがかわいいでしょ？ってフィギア盛って来るアニオタ君もいたし…
どんどん時間が過ぎていった

「うぅ～ん…」
「菜穂！最終日だから早く準備して！！」
駿に叩き起こされて重たいまぶたを上げた

君とあなたと私～1～（後書き）

修学旅行早く行きたいっす！

君とあなたと私～完結編～

「最終日だなぁ…」
「早かったね～」
「そうだな」

今日は最後の楽しみに残しておいた大阪城へいった

「おかぁさん！メッチャでかいで！」
「そりゃそうやろ～この建物はメッチャ昔に作られてんで♪」

いろんな所から聞こえて来る新鮮な関西弁

「菜穂！隆！めっちゃおおきいよ！」
「うん、怒られるよw」
「混ざってるな」

そう言って公園内にはいって、城を見上げた

「すごい迫力…」
「だな」
「写真…」
「あぁ！写真やったら撮ったろ撮ったろ！ここやんな？いくで？ハイチーズ！」
「あぁ…あ…ありがとうございます…」
「いいっていって！観光楽しんでな♪」

急に話しかけられた駿は戸惑い気味

「すごい迫力…」

「大阪のおばちゃんってやつだな」

「みてみて！あの3人どうゆう関係やろ♪」

「あの女の人うらやましいな！」

「あたしあの眼鏡のひとタイプやわ♪」

「うそぉ！ウチはかけてない方が好きやわ」

ま…丸聞こえw

「菜穂？」

「ん？」

「やっぱなにもない！」

「そ？」

いろんな関西のひとに会って親切にしてもらって…

「おなかへった～」

「そろそろ飯行くか」

「そうだな」

大阪城の近くにあった定食屋さんに入った

「うま…」

「このソースすごいおいしい！」

「なんだこれ…うますぎ！！」

それぞれたのんだものに食いついた

「すごい食べっぷりやな！あたしも嬉しいわぁ♪」

お盆を持って立ち止まったあたしたちと同い年ぐらいの女の子

「すごくおいしいです！」
「ほんと、教えてほしいぐらいだな」
「皆関西のひとなん？やっぱ修学旅行生？」
「はい」
「ここ城の近くやからよぉ来てくれんねん♪」
「アルバイトですか？」

あたしがそう聞くと

「何言うてんの！奈々子ちゃんはここの看板娘やで♪」
「おっちゃん！いらんこと言わんとってよ～」
「ごめんごめん！でもかわいいやろ？」
「そうですね！看板娘かぁ♪憧れちゃう！」

その発言に2人からの視線を感じる

「な…なによw」
「菜穂の看板娘ww」
「君は俺の側にいればいいんだよ」
「あぁあ、あたしも普通の恋がしたい！あたしはあなたにあこがれるわ」
「なんでですか？」
「だって、どう考えても三角関係ってやつやろ？きみら」
「なっ…！！」

一番反応したのは駿

「あたしの予測では、眼鏡君と女の子が付き合ってて、君が隙間を狙ってる感じやろ？w」

恐るべき関西人…

「で、どうなん？」

「そ…それは…」

「奈々子！カツ丼上がったで！はよ持っていって！」

「はいはい…じゃ、ごゆっくり～♪」

みんなが終わってレジに向かう

「ちょっと来て！」

看板娘の奈々子さんが駿を呼び出す

「なにこそこそ…」

「いいんじゃない♪」

「ごめんごめん！」

「何吹き込まれてたの？」

「なんでもねぇよw」

そこからは大阪内の大っきいショッピングモール行ったり

2人を付き合わせちゃった♪w

「そろそろ集合しないとな」

「だな」

「もう終わりかぁ…」

「最後に行くか！」
駿が指差した方は大阪に似合わない感じの神社
「神社？」
「記念にお祈り！」
「いいね♪」
一段一段階段を上がる
「あのさ、駿さっき奈々子さんになんて言われたの？」
「…ここにお参りしていけって…」
「なんで」
「……知らねぇ！」
にげたな…
ぱっと目に入った神社の看板
〜ここは恋愛成就で有名な神社――〜
「…駿…」
「菜穂？どした？」
「ううん！はいお賽銭準備できた？」
「ん」
みんなで一緒に賽銭箱に投げ、手を叩いた
「駿何お祈りしたの？」

「俺は成績が上がりますようにって」
「隆は？」
「俺はいい大学行けますようにだな」
「なにそれ！みんな自分のことじゃん！」
「そんな菜穂はなんて願ったんだよ」
「あたしは…言わない！」
「あ！セコくね？」
「聞いたんだから言えよな」
「やだぁ！言わないもん♪」

こうして楽しみだった修学旅行がおわった

＊　＊　＊　＊　＊

隆はこう願った
「菜穂とずっと仲良くいれますように…」

菜穂はこう願った
「世界のみ～んなが幸せになれますように」

駿はこう願った

――「菜穂と隆が…永久に幸せでありますように」

君とあなたと私～完結編～（後書き）

最後まで読んで頂いてありがとうございました！

結局未練があっても2人の幸せを願ってあげれる心の広さが素晴らしいですよね♪

短めの話だったけど、達成感が得られてよかったです！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5452y/

あの空へ

2011年11月23日14時51分発行